『中国地区英語教育学会研究紀要』 №32（2002）

談話の観点から捉える英語イントネーション - 発語内行為を中心として -

広島大学大学院　大和知史

0　はじめに

近年叫ばれているコミュニケーション重視の英語教育への関心が高まる中、英語音声指導への需要は大きなものであろう。その中でも発音指導、特にイントネーションの指導は、まだまだ研究の余地を残している領域と言ってよいであろう。これまで、日本人英語学習者によるイントネーションの特徴の音声的記述は比較的多く見られるが、教師、学習者はそうした特徴に対してどのような視点をもって取り組むべきか、という指導の観点に関してあまり明らかになっていない。

この点について、これまで筆者は日本人英語学習者によるイントネーションの特徴に対し、「談話の観点」から捉え直しを試みることで、今後のイントネーション指導に対して示唆を導くことができると主張している（拙論 2001）。

そこで、本論では、「談話の観点」の一つとして、イントネーションの発語内行為を示す機能（語用論的機能）を取り上げる。これまでの先行研究における英語イントネーションの捉え方を批判的に考察し、以下の２つの問題点を指摘する。

(1)　英語イントネーションを扱う際に、発語内行為[1]の観点から捉えた研究が少ない。これはすなわち、明瞭性（intelligibility）・理解性（comprehensibility）・解釈可能性（interpretability）の各概念から考えると、それらのうち発語内行為に関連の深い解釈可能性に着目して捉えていないということになる。

(2)　先行研究における英語イントネーションの判断方法は、リカート・スケール（Likert scale）を用いており、しかもその尺度は母語話者への近似性であるため、(1) に述べた語用論的機能面を無視しており、さらに英語母語話者中心の指標になっている。

これらを指摘した上で、今後英語イントネーションを捉える際には、発語内行為に関連する解釈可能性という観点を持つ必要があること、判断手法としては機能面を損なうことのないような方法（本論においては、多肢選択方式による機能選択）を取る必要があること、の２点を主張する。これらの点を考慮した研究を行うことで、イントネーションを捉える際に「談話の観点」を重視することが可能になる。また、こうした研究は、例えばイントネーションの評価を行う際の適切な手法となる可能性を持っていると思われる。

1　英語イントネーションを発語内行為から捉える観点

本項では、先にあげた問題点 (1) に関して考察する。先行研究において、英語イントネーションを、発語内行為を示す機能との関連から捉えた研究が少ないことを指摘する。その際には、発話の理解に関する概念である明瞭性・理解性・解釈可能性の３つの次元から考察する。

1.1　明瞭性(intelligibility)・理解性(comprehensibility)・解釈可能性(interpretability)の定義[2]

本論において、明瞭性 (intelligibility)、理解性 (comprehensibility)、解釈可能性 (interpretability) という概念を用いるが、その定義をここで明確に提示する。これまで行われた定義に関する議論を概観し、本論において用いる定義を提示する。

これまで発話の理解に関する概念は一般に "intelligibility"、"understanding" という言葉を用いて考えられてきた。しかしながら、それらにより理論的な基盤を与えるために、社会言語学の枠組みでこれらの概念の考察を行ったのが、Smith and Nelson (1985)、Nelson (1995) である。特に前者は、1950 年から 1985 年までに "intelligibility" と "comprehensibility" に関して記述された文献、資料 163 点を考察した。その結果、これまでそれらの概念は区別されず使用されてきたことを指摘し、それぞれに以下のような意味づけを行った。

(1) intelligibility	word/utterance recognition
(2) comprehensibility	recognition of word/utterance meaning (i.e. propositional content, or Austin's locutionary force)
(3) interpretability	recognition of meaning behind word/utterance (i.e. Austin's illocutionary force)

(Smith and Nelson 1985: 334; Jenkins 2000:70 を基に筆者がまとめた)[3]

これらを Nelson (1995) による例を用いて説明すると、(1) ではそれぞれの語や発話における文レベルの要素 ("You can open the window" における "open"、"window" など) が認識されることである。(2) では、それぞれの語が意味を持つものとして認識されることである ("You can open the window" における "can" が能力を表す単語であること、など)。そして (3) では話者の意図や目的、発話の裏にある意味の理解を示す ("You can open the window" が窓を開けて欲しいと依頼することを表す、など)。Smith and Nelson (1985) によれば、最も深刻な誤解が起こりうるのは (2) および (3) のレベルにおいてであると述べている。

以上のように、これまで概観した定義は揺れが生じていたことが明らかになった。これらを踏まえて、現在最も妥当であり、多く流通しているであろう定義を本論において用いる。したがって、本論における明瞭性・理解性・解釈可能性の定義は、Smith and Nelson (1985)、Nelson (1995) のものを用いることとする。

1.2　明瞭性・理解性・解釈可能性と発音

先に述べたように、明瞭性・理解性・解釈可能性の定義は揺れていたが、Smith and Nelson (1985)、Nelson (1995) による定義を採用することとした。それでは、その定義を持って発音の領域との関連を考察するとどのようになるのであろうか。

3 つの概念の中でも明瞭性は、古くは Abercrombie (1956 reprinted in 1991) が "language learners need no more than comfortably intelligible pronunciation (93) " と述べ、発音の到達目標として掲げたものである。そしてその考え方が、Pennington and Richards (1986)、Kenworthy (1987)、Morley (1991) などに反映され、近年発音指導の目標として掲げられることが多い。しかし、これらにおいて明瞭性としてあげられている要素には、Smith and Nelson (1985) の分類に従えば、明瞭性、理解性の 2 つが混在していることが分かる。

また、一方、国際英語を視野に入れた音声を考える Jenkins (2000) は、Smith and Nelson (1985) らによる定義以降においてもこれらの概念に揺れがあることを指摘した (Brumfit 1982; Bamgbose 1998; James 1998)。しかしながら、「国際語としての英語 (English as an International Language)」の立場から考えると、上で Smith and Nelson (1985) が述べた (2) 理解性、(3) 解釈可能性にいたる前に (1)

の明瞭性のレベルで誤りが生じることが多いとし、(2)、(3) のレベルにおいて最も深刻な誤解を生じるという点には留保の姿勢を見せている。

以上のような発音指導における明瞭性・理解性・解釈可能性を考えると、「明瞭性」という言葉の定義がはっきりせずに、Smith and Nelson の言うところの明瞭性・理解性を包含する形で捉えられていることが多い一方、Smith and Nelson の定義を取り入れつつも、発音指導において焦点化するべきところは明瞭性のみである、と明言するという 2 通りの捉え方があることが分かった。しかしながら、発音の様々な要素を考えた時、解釈可能性に深く関与している要素がある。その一つは、イントネーションである。次の引用は日本語音声教育の文脈でのものであるが、イントネーションと解釈可能性との関連を示したものであり、なおかつ英語教育においても当てはまると考える。

> 聞き手に全く通じないのであれば、すぐに聞き返され、発話者にはくり返したり、他の表現に切り替えるなどして伝達作業を完遂させる機会も残されるが、(話者の意図しない意味や感情を伴って理解される誤解は、) ひどい場合になると人間関係に軋轢が生じたり、発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない (土岐 1989:113 cited in 松崎 2001)。

以下に、Gumperz (1982) による英語の例をあげる。イギリスの空港のカフェテリアに勤務するインド、パキスタン系従業員は、彼らの発するイントネーションのみによって "surly and uncooperative" という評判を得てしまった。なぜなら、"Gravy." を供する際に、英語母語話者であれば上昇調を用いるところを彼らは下降調を用いて発話していたからである。この例からは、"Gravy." という単語に関しては認識されており (明瞭性)、さらに "Gravy." という発話の内容が何であるかに関しても認識されている (理解性) ことが分かる。しかしながら、"Gravy." を下降調で言うことによって聞き手の認識に誤解が生じている (解釈可能性)、ということが分かる。さらに、以下に O'Connor and Arnold (1973 cited in Togo 1999: 75) による例をあげる。

A: She is a pretty girl, isn't she?

B: She has a lovely face.

(//↘ she has a lovely FACE// //↘↗She has a lovely FACE//)

(音調表記は Brazil 1997 に則り、筆者が行った)

B による発話を下降調で言うか、下降上昇調で言うかによって、前者は陳述を、後者は譲歩を示すなど、大きく話者意図が変化する。つまり、単語の連鎖としての B の発話を認識していても (明瞭性)、またその示す命題内容が認識されていても (理解性)、その意図するところを認識しているかどうかは (解釈可能性)、特にこの場合イントネーションに大きく拠っているのである。

このように、発話意図を伝達するというレベル (つまり解釈可能性) におけるイントネーションの産出、知覚を誤ることで、談話の流れに支障をきたすことが報告されており (Clennell 1997; Togo 1999)、日本人英語学習者にとっても問題のある領域と考えられる。これまでの議論を考え合わせると、イントネーションを扱うことと、解釈可能性を扱うことの必要性を導くことができるであろう。

1.3 発話の意図 (解釈可能性) を考察した研究の欠如

本項では、これまで発音を取り上げた先行研究 (特に非英語母語話者の英語に対する英語母語話者による反応の研究) において、イントネーションはどのように扱われてきたのか、に関して考察する。Appendix A は、1980 年以降の明瞭性・理解性・解釈可能性を考察した先行研究をその考察範囲、イントネーションの取り扱い等を基に分類したものである。

Appendix A を見ると、これまでの研究の考察範囲は明瞭性 (intelligibility)、理解性 (perceived comprehensibility) を確認するものが、14 の研究のうち 12 あることが分かる。また、発話の判断方法は、それらの多くがディクテーション課題や5〜9 段階のリカート・スケール方式を取っていることが明らかに

なった。このことは、Matsuura, Chiba and Fujieda (1999)、Mastuura (2000) が、これまでの先行研究 (Suenobu, Kanzaki and Yamane 1992; Munro and Derwing 1995; Derwing and Munro 1997 など) において、明瞭性を測るためには、ディクテーション課題が最も一般的であり、理解性を測るためには、リカート・スケール (7 段階〜9 段階) による判断が最も一般的である、と述べていることからも分かる。

確かに、ディクテーション課題に関しては、個々の発音が聴者にどれだけ正確に認識されているか (明瞭性)、を測るには適切な方法であると思われる。また、リカート・スケールによる理解のしやすさの判断課題に関しても、発話の意味内容が聴者にどれだけ正確に認識されているか (理解性)、を測るには現在のところ適切な方法であると思われる。

しかしながら、これらのいずれの方法によっても測ることのできていない領域が存在する。それは、いずれの方法においても発話者の意図が正しく伝わったか否かということに関しては捉えられていないという点である。換言すれば、話者によって伝達される発語内行為についての判断はなされていないということになる。こうしたことから、Appendix A を見る限り、発話の解釈可能性 (interpretability) に関してはあまり研究がなされておらず、これまで看過されてきた領域であると言える。

以上考察したように、発話の判断の指標と考えられる概念である明瞭性・理解性・解釈可能性に関して、これまでの研究においては明瞭性・理解性に焦点を当てるものが多く、解釈可能性に焦点を当てている研究は少なかった。特に、イントネーションに焦点を当てるならば、その無意図的な誤りによって最も深刻な誤解が起こり得るであろう解釈可能性を取り上げた研究が今後必要になることが分かった。

2 英語イントネーションを発語内行為から捉える際の方法

これまで、英語イントネーションを発語内行為との関連から捉えた研究が少ないことを述べ、その領域の研究の必要性を主張した。それではその必要性に答えるためには、換言すると、具体的に英語イントネーションを発語内行為との関連から捉えるためには、どのような方法を取ればよいのであろうか。本項では、冒頭で述べた問題点 (2) について、英語イントネーションを発語内行為との関連から捉えるための方法を、これまでの方法との対比から導く。

2.1 イントネーションを判断する指標

2.1.1 これまでの指標の問題点

1.3 において解釈可能性に関しての研究が少ないと述べたが、それはイントネーションを考慮した研究が皆無であるということを含意するものではない。Appendix A にあげた先行研究において、イントネーションを音声要素の一つとして取り扱っている研究は 14 のうち、12 と多いことが分かる。

それらイントネーションの判断を加味している研究が用いている指標の多くはリカート・スケールを用いたものであり、その尺度は母語話者に近いか否かというものであった (Fayer and Krasinski 1987; Matsunaga and Caprio 1989; Anderson-Hsieh, Johnson and Koehler 1992; Derwing and Munro 1997; Munro and Derwing 1999)。

このことは、次の 2 つの点で問題があると言える。一つ目は、イントネーションによって母語話者に近似しているか否かを判断しているのみであり、イントネーションの機能が果たされているか否かについては判断されていないという点である。そして、二つ目は、母語話者、しかも多くの場合イギリス・アメリカ英語母語話者、が基準となっており、現在盛んに議論されている様々な英語変種を考慮しているとは思われない点である。

一点目に関して、Appendix A にあげた先行研究において、発話者によるイントネーションを判断する際の尺度のほとんどが英語母語話者への近似性を判断するものであった。例えば、Munro and Derwing (1999) において、イントネーションは 9 段階のリカート・スケールで判断されていたが、その両端には、

"native-like" から "not at all native like" と記されている。その他の研究においても言葉の差こそあれ、同様の尺度を用いていた。こうした尺度に基づくリカート・スケールは、イントネーションを総合的に捉えて判断するために用いられていると思われる（以後、総合的リカート・スケールとする）。つまり、これによって「母語話者に似ている」という評価を得たとすれば、その話者は時には美的な意味合いで、また時には機能的な意味合いで母語話者に似ていると判断されたということになる。

しかしながら、上のような総合的リカート・スケールに伴う欠点として、個々の側面の評価を曖昧にしてしまう点があげられる。このスケールの場合、必ずしもイントネーションが果たしうる機能の効果を考慮しているとは言えない。言い換えれば、イントネーションの果たす発語内行為を示す機能に関して判断することができないのである。こうした領域に関して判断することができるということは、先述のように発話理解において最も深刻な誤解を起こしうる解釈可能性という領域を捉えることができ、また談話においてイントネーションの果たす機能を理解しているかどうかが確認できる、ということである。

二点目に関して、先に述べた英語母語話者への近似性を基準とすると、イントネーションを判断する人間、つまり英語母語話者が基準となる。Appendix A にあげた先行研究においては、多くの場合アメリカ人英語母語話者が判断者となっている。こうした判断者の偏りの理由として、これらの研究が行われた背景として、主にアメリカでの移民、留学生による大学、職場等におけるコミュニケーションの不成立という事情があったことがあげられる（田邉 1999）。しかしながら、このことは非英語母語話者が話者となり、英語母語話者が聴者となる、という構図を定着させ、その逆である英語母語話者が話者となり、非英語母語話者が聴者となる、さらには近年の世界英語という状況から考えて、非英語母語話者が話者となり、同じく非英語母語話者が聴者となる、という構図を図らずも無視する結果となったのではないであろうか（Smith and Nelson1985; Taylor 1991; Nelson 1995）。

2.1.2　問題点の解決法

以上のように、これまでの研究におけるイントネーションの扱いは、明瞭性・理解性の範囲内であることもあり、機能面（ここでは特にイントネーションの発語内行為を示す機能）を看過していることに加えて、英語母語話者がその評価の中心となっているという 2 点が指摘された。それでは、どのようにすればこれらの問題点が解決するのであろうか。以下ではその方法を考察する。

イントネーションの発語内行為を示す機能を考慮する際に考えられる方法として、発話に対して聴者が受け取った意図に関して自由に記述を行うものや、多肢選択方式による "paraphrased meaning test（Levis 1999）" があげられる。前者に関しては、得られる情報に関する統制が全くきかない点や、実質的な実施可能性の面から考えて、あまり適した方法であるとは言えないであろう。

一方、後者の "paraphrased meaning test" という方法は、課題となる発話の解釈を言い換えたものが多肢選択の選択肢としてあげられており、その中から選択するというものである [3]。その実施可能性に関してはリカート・スケールと同様質問紙調査において実施できるため、比較的簡便である。また、こうした、"paraphrased meaning test" は、これまでイントネーションの態度的機能を判断するものとして多く用いられていたが（Ladd, Scherer and Silverman 1986; Levis 1999）、発語内行為を示す機能を判断するものとしても適当であると思われる。というのも、イントネーションの発語内行為を示す機能をある程度列挙することで、選択肢として用いることが十分可能であるからである。

ここで問題となるのは発語内行為をどのように選択肢として列挙できるかということになるであろう。最も有名な発語内行為の分類として考えられるのは、Austin（1962）や Searle（1968; 1976）による分類であろう。Austin は遂行動詞を基に数多くの分類を提示しているものの、その数の多さや分類内の類似性といった点において欠点が指摘されている。また、Searle は Austin の抱えた欠点を解決しようと分類を再編成することを試み、成功したが、抽象度が高くなってしまうという欠点を拭うことはできないであ

ろう。そこで、イントネーションと発語内行為との関連、また選択肢の提示の2点を考えると、これら2つの考えに依拠することが困難であることが分かる。したがって、その他の枠組みを探求する必要がある。

そこで、イントネーションと発語内行為との関連を機能として提示しているもので、なおかつ簡潔な分類を提示している枠組みとしてTench (1996) によるイントネーションと発語内行為の記述を援用することができるのではないであろうか。彼は、イントネーションの機能の一つとして発語内行為的機能をあげており、全てとは言わないまでもイントネーションと相当数の発語内行為との関連を記述している。また、大きく分類して「情報、現実、信念に関するもの (information, reality and belief)」、「他人の行動に影響を与える行為 (suasion)」、「社会的なやり取り (social exchanges)」、の大きく3つに分類しており、それぞれの下位分類において、発話が話者の支配下にある時 (dominance) には下降調が用いられ、発話が話者の服従を示す際 (deference) には上昇調が用いられるとする。これを参考に選択肢を作成することができるであろう。

実際に、多肢選択方式を用いた研究として、Luthy (1983)、拙論 (2000) をあげることができる。前者は"Oh-oh"、"Oops"といった「非語彙的な」発話とその解釈との一致を多肢選択方式により見たものである。後者は、日本人英語学習者を対象とした対話文を用い、発話者の意図と受け取り手の意図との一致をLuthyと同様多肢選択方式により見たものである。ただし、この方法を用いる際には、選択肢が発語内行為を明確に反映するよう、発話行為理論との整合性を十分に考慮しなくてはならず、これら2つの先行研究においても未だなされていない[4]。

3　まとめと今後の課題

以上のように、まずイントネーションの発語内行為を示す機能を捉えた先行研究について、明瞭性・理解性・解釈可能性という3つの概念との関連から考察した。その結果、イントネーションの発語内行為を示す機能に関する研究、換言すれば解釈可能性を扱った研究は、現状においてあまり存在せず、イントネーションの機能面の重要性を考慮するならば今後多くの研究が必要となる領域であることが分かった。

次に、解釈可能性に関する研究が必要になるという前提において、これまでの方法との対比から、イントネーションを判断する適切な方法に関して考察を行った。これまでの判断方法が英語母語話者をその基準とする近似性にあったことが明らかとなり、イントネーションの機能が果たされたか否かに関しては考慮されていなかったことが分かった。具体的な問題点として、「どの程度英語母語話者に近似しているかを測る総合的リカート・スケールを用いていたために、近年の世界英語という視点を看過している恐れがあると思われる」、「英語母語話者への近似の仕方が機能的なものなのか美的なものなのか曖昧になる」、の2点を指摘した。それらの指摘を受け、今後イントネーションの機能を考慮に入れるとすれば、その機能の種類を判断するような多肢選択方式を用いる方が総合的リカート・スケールより適している、と結論付けた。その際にはイントネーションと発語内行為との関連を捉えた枠組みを用いることで選択肢の恣意性を減ずることが可能になると思われる。

これらの点を考慮に入れた上で、今後より一層のイントネーションの判断に関する研究 - 特に機能面に焦点を当てたもの - を行うことが必要となる。現在のところ、こうした研究が実証レベルで行われていないという点からも、その必要性が求められるであろう。そうすることにより、イントネーションの発語内行為を示す機能を談話の観点の一つとして捉えて指導する際の指標づくり行うことが可能になるであろう。筆者が現在取り組んでいる日本人英語学習者によるイントネーションの理解と産出に関する研究において機能面に焦点を当てた調査を行う予定である。これに関しては稿を改めて論じることとしたい。また、さらに研究が進めば、英語学習者によるイントネーションの機能の使用に対する適切な評価への応用の可能性が出てくると考える。

註

1　発話行為理論(speech act theory)において、発語行為(locutionary act)、発語内行為(illocutionary act)という訳語に統一していることに注意されたい。その際は、サール(著)坂本、土屋(訳)(1986)、クールタード(著)吉村、他(訳)(1999)、ヴァンダーヴェーケン(著)久保(訳)(1995)などを参考にした。

2　intelligibility、comprehensibility、interpretability のそれぞれの訳語に関しては、現在筆者が見る限り一定ではないようである。例えば、ジョンソン、ジョンソン(編)岡(監訳)(1999)においては、intelligibility を「わかりやすさ」、comprehensibility を「理解しやすさ」と訳出している。また、リチャーズ、他(編)山崎、他(共訳)(1988)においては intelligibility を「理解度」と訳出している。本論においては、Smith and Nelson (1985)、Nelson (1995) らによる定義を反映したものを訳語として採用するために、それぞれを「明瞭性」、「理解性」、「解釈可能性」とした。

3　選択肢を設けたイントネーションテストとして、Cruz-Ferreira (1989) をあげることができる。このテストにおいては、読み上げられた文の解釈として最も適したものを3つのうちから一つ選択するというものである。他に、文強勢の位置による意味の違いを考慮に入れたものであるが、Davies and Alderson (1977 cited in Boyle1987)、Byrne and Walsh (1973 cited in Boyle1987) においても同様の形式でテストを作成している。

4　現在筆者は博士論文において、「イントネーションによって伝達された発語内行為の理解と産出」に関する研究を行っており、"paraphrased meaning test" を行うこととした。その質問紙における選択肢には、Tench(1996)による発語内行為とイントネーションとの記述を取り入れることとし、十分に発語内行為が反映されるよう配慮している。

参考文献

Abercrombie, D. (1956). Teaching pronunciation. Reprinted in Brown, A. (ed). (1991). *Teaching English pronunciation: a book of readings.* London: Routledge. (pp.87-95)

Albrechtsen, D., Henriksen, B. and Færch, D. (1980). Native speaker reactions to learners' spoken interlanguage. *Language Learning,* 30, 365-396.

Anderson-Hsieh, J. and Koehler, K. (1988). The effect of foreign accent and speaking rate on native speaker comprehension. *Language Learning,* 38, 561-613.

Anderson-Hsieh, J., Johnson, R. and Koehler, K. (1992). The relationship between native speaker judgments of nonnative pronunciation and deviance in segmentals, prosody, and syllable structure. *Language Learning,* 42, 529-555.

Austin, J. L. (1962). *How to do things with words.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Bamgbose, A. (1998). Torn between the norms: innovations in world Englishes. *World Englishes,* 17, 1-14.

Boyle, J. P. (1987). Perspectives on stress and intonation in language teaching. *System,* 15, 189-195.

Brumfit, C. J. (ed.). (1982). *English for international communication.* Oxford: Pergamon Press.

Clennell, C. (1997). Raising pedagogic status of discourse intonation teaching. *ELT Journal,* 51, 117-125.

Coulthard, M. (1985). *Introduction to discourse analysis.* London: Longman. (吉村昭市、貫井孝典、鎌田修(訳). 1999. 『談話分析を学ぶ人のために』. 京都:世界思想社.)

Cruz-Ferreira, M. (1989). A test for non-native comprehension of intonation in English. *IRAL,* 27, 23-39.

Derwing, T. M. and Munro, M. J. (1997). Accent, intelligibility, and comprehensibility: evidence from L1s. *SSLA,* 19, 1-16.

Fayer, J. M. and Krasinski, E. (1987) . Native and nonnative judgments of intelligibility and irritation. *Language Learning,* 37, 313-326.

Gumperz, J. J. (1982) . *Discourse strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.

James, C. (1998) . *Errors in language learning and use: exploring error analysis.* Essex, Harlow: Addison Wesley Longman.

Jenkins, J. (2000) . *The phonology of English as an international language.* Oxford: Oxford University Press.

Kenworthy, J. (1987) . *Teaching English pronunciation.* Harlow, Essex: Longman.

Ladd, D. R., Scherer, K. and Silverman, K. (1986) . An integrated approach to studying intonation and attitude. In Johns-Lewis, C. (1986) . *Intonation in discourse.* Beckenham: Croom Helm. (pp125-138)

Levis, J. M. (1999). The intonation and meaning of normal yes/no questions. *World Englishes,* 18, 373-380.

Luthy, M. J. (1983) . Nonnative speakers' perceptions of English "nonlexical" intonation signals. *Language Learning,* 33, 19-36.

Matsunaga, T. and Caprio, M. (1989) . Native and non-native speaker evaluation of non-native English students' language production. *JACET Bulletin,* 20, 37-50.

Matsuura, H., Chiba, R. and Fujieda, M. (1999) . Intelligibility and comprehensibility of American and Irish Englishes in Japan. *World Englishes,* 18, 49-62.

Matsuura, H. (2000) . Perceived comprehensibility of native English for EFL learners. *JACET Bulletin,* 32, 79-90.

Morley, J. (1991) . The pronunciation component in teaching English to speakers of other languages. *TESOL Quarterly,* 25, 481-520.

Munro, M. J. and Derwing, T. M. (1994) . Evaluations of foreign accent in extemporaneous and read material. *Language Testing,* 11, 253-266.

Munro, M. J. and Derwing, T. M. (1995) . Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in the speech of second language learners. *Language Learning,* 45, 73-97.

Munro, M. J. and Derwing, T. M. (1998) . The effects of speaking rate on listener evaluations of native and foreign-accented speech. *Language Learning,* 48, 159-182.

Munro, M. J. and Derwing, T. M. (1999) . Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in the speech of second language learners. *Language Learning,* 49, 285-310.

Nelson, C. L. (1995) . Intelligibility and world Englishes in the classroom. *World Englishes,* 14, 273-279.

Pennington, M. C. and Richards, J. C. (1986) . Pronunciation revisited. *TESOL Quarterly,* 20, 207-225.

Searle, J. R. (1969) . *Speech acts: an essay in the philosophy of language.* New York: Cambridge University Press. (坂本百大、土屋俊 (訳) . (1986) . 『言語行為 言語哲学への試論』. 東京: 勁草書房.)

Searle, J. (1979) . A Taxonomy of illocutionary acts. In Martinich, A. P. (ed) . (1996) . *The Philosophy of Language.* 3rd ed. Oxford: Oxford University Press. (pp.141-155) .

Smith, L. E. and Nelson, C. L. (1985) . International intelligibility of English: directions and resources. *World Englishes,* 4, 333-342.

Suenobu, M., Kanzaki, K. and Yamane, S. (1992) . An experimental study of intelligibility of Japanese English. *IRAL,* 30, 146-156.

Taylor, D. S. (1991) . Who speaks English to whom? The question of teaching English pronunciation for global communication. *System,* 19, 425-435.

Tench, P. (1996) . *The intonation systems of English.* London: Cassell.

Togo, K. (1999) . *A Study of pedagogical phonetics: with special reference to English intonology.* Tokyo: Otowashobo Tsurumishoten.

Yamato, K. (2000) . Native speaker reactions to Japanese EFL learners' speech, looking at

intonation as an intention conveyor: a pilot study. *JACET Bulletin,* 31, 91-104.
ダニエル・ヴァンダーヴェーケン（著）．久保進（訳注）．（1995）．『発話行為理論の原理』．東京: 松柏社.
ジョンソン・K、ジョンソン・H（編）．岡秀夫（監訳）．（1999）．『外国語教育学大辞典』．東京: 大修館書店.
田邉祐司．（1999）．「実践的コミュニケーション能力の育成ー新教育課程の下での新たな英語教育ー新たな英語発音指導の形ー」．*Journal of the Institute for Development of English Language Education,* 1, 96-114.
深谷昌弘、田中茂範．（1996）．『コトバの〈意味づけ論〉 - 日常言語の生の営み』．東京: 紀伊国屋書店.
松崎寛．（2001）．「日本語の音声教育」．城生佰太郎（編）．『コンピュータ音声学』．東京: おうふう．pp.207-258.
大和知史．（2001）．「日本人英語学習者のイントネーションに対する談話の観点からの分析」．『中国地区英語教育学会研究紀要』．31, 125-134.
リチャーズ・J、プラット・J、ウェーバー・H.（編）．山崎真稔、高橋貞雄、佐藤久美子、日野信行（共訳）．（1988）．『ロングマン応用言語学用語辞典』．東京: 南雲堂.

Appendix A　明瞭性・理解性・解釈可能性を考察した先行研究

研究	考察範囲*	材料	評定方法	イントネーションの取り扱いの有無	イントネーションの評定方法
Albrechtsen, Henriksen and Færch (1980)	明瞭性; コミュニケーション方略	インタビュー	5段階スケール	○	6段階スケール
Luthy (1983)	非語彙的なイントネーション信号の解釈可能性	筆者による発話	多肢選択方式	○	多肢選択方式
Fayer and Krasinski (1987)	母語話者と非母語話者との評価の違い; 理解性	あるトピックについて話す	5段階スケール	○	5段階スケール
Anderson·Hsieh and Koehler (1988)	発話速度と外国語訛りの関係; 理解性	パッセージを3段階の速度で音読	リスニングテスト; 5段階スケール; 質問紙	○	7段階スケール
Matsunaga and Caprio (1989)	判断者による評価の違い; 理解性	あるトピックについて話す様子をビデオに録画	6段階スケール	○	6段階スケール
Anderson·Hsieh, Johnson and Koehler (1992)	発音の誤りと発音の誤りとの関係; 理解性	SPEAK testからの発話サンプル	7段階スケール	○	7段階スケール
Suenobu, Kanzaki, and Yamane (1992)	日本人による英語の音声的特徴と明瞭性の度合い	52の文を音読	ディクテーション	×	
Munro and Derwing (1995)	明瞭性; 理解性; 外国語訛り	漫画の描写課題	ディクテーション; 9段階スケール	○	9段階スケール
Derwing and Munro (1997)	明瞭性; 理解性; 外国語訛り	漫画の描写課題	ディクテーション; 9段階、5段階スケール	○	9段階スケール
Munro and Derwing (1998)	発話速度と外国語訛りによる理解性	物語の音読課題	9段階スケール	×	
Matsuura, Chiba and Fujieda (1999)	英語の変種に対する親密度の影響; 理解性	自己紹介	部分ディクテーション; 7段階スケール	○	7段階スケール
Munro and Derwing (1999)	明瞭性; 理解性; 外国語訛り	漫画の描写課題	ディクテーション; 9段階スケール	○	9段階スケール
Matsuura (2000)	理解性と好みとの関係; 理解性と曖昧耐性との関係	自己紹介	7段階スケール	○	7段階スケール
Yamato (2000)	解釈可能性	対話文音読課題	多肢選択	○	多肢選択

(註*: ここに示す明瞭性・理解性・解釈可能性は本論中の定義に従うものであり、必ずしも各論文内におけるるものとは同一ではない)